



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.109

2012.10.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と土器の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

27

「山内清男先生の 東大理学部研究室・縄文原体の授業」

高校時代 私達は教師の殆どにアダナをつけた。私は2度失敗している。1度は職員室に入るとき何々先生に用事が有ってきました。と言う。英語の長沼先生をアダナのダルマ先生にと言ってしまう叱られた。もう一度は廊下で体育授業の悪口を言っていて鶴川先生の悪口をアダナのツルさと話していたら、本人が後ろに居た。それ以来体育授業をサボり、結果卒業認定会議に私の必修体育単位が問題になり、やっとで卒業した。

大学ではアダナは少ない。杉原荘介先生のダンナと、山内先生の山ちゃんは学生の中では普通に言われていた。そして両先生は学生からみれば特別な存在でした。

私が山内研究室を訪ねたのは大学入試が終わった後、戸沢充則さんの誘いで訪ねたのが最初でした。先生は50才でした。大学に入ってから本郷通りを歩いて通った。

人類学棟の階段を上がった4階のガラス戸の棚に採集標本が飾られ、今でも忘れられないのは南米原住民首狩族の頭の中身を抜き出し握りこぶし大となった頭部です。その奥に先生の細長い研究室がある。左右両壁と中央に書棚、狭い通路を通過して窓際に先生の机がある。小さいアルミの急須で出がらしのお茶を入れてくれる。私は先生と話すよりも廊下の長机でお手子の遺物整理をみて、彼と話すのが楽しみでした。国大生の磯崎正彦君が長野市伊勢宮遺跡の遺

物を整理していた。その後高橋護君だった。明大生とあって話かはずんだ。ある日 先生が研究室から出てきて「君は高橋君の邪魔をするな」と言い、研究室の戸を思いっきり強く閉めた。それでも私は懲りずに通った。29年5月 先生から研究室に来るようにとの葉書を貰った。行くと藤沢宗平先生が内地留学で来ていて、私も発掘を手伝った上伊那郡刈谷原遺跡の遺物を整理していた。翌日手いれに行く和小林行雄先生が来ていて共に話を聞き、夜 藤沢先生の下宿で11時頃まで話した。その後も藤沢先生の整理を手伝った。

28年4月 考古学講座学外講師に山内先生になり、縄文原体の講義と言う。二度とは聞けないと芹沢さんを始め講座生全員が受講した。最初は細長く切った和紙で左捻り・右捻りのコヨリ作り。出来たら端を持って立たないと駄目。出来なかつたが慣れると出来た。これがIとで、二つ折りにして捻ると縄になり、R(l)・L(r)で、さらに二本で捻ると縄文原形でLR・RLになる。それを油粘土に縦回転・横回転・斜回転して、其々の文様の走り・粒のあり方・粒の中の繊維の方向を観察した。これによって土器にある縄文の原体がRLかLRかを区別し、さらに土器への回転方向を知った。これを基本に無節・単節・複節の区別や、様々な原体を組み合わせたの施文を、実際に原体を作って捻り合せ油粘土に回転施文して確認するといった授業でした。全員が本当に熱心に取り組んだ。授業のノートで手元に残っているのはこれ一つで私にとって大事な財産である。卒業後、原体模型を作り台紙に張り、拓本墨で回転押捺し、それをアンチヨコにして土器の縄文を調べた。

卒論では先生所蔵遺物 曾根・普門寺・高蔵・黒崖・大境・米倉山遺跡等を拓本にとり、人類学図書室の考古学関係の文献を殆ど読んだ。記録を見ると29年7回 30年12回たずねている。国大の9回に比べても多い。

卒業後 先生からは抜き刷りや先史考古学論集を謹呈 山内清男 と署名入りで送ってくれた。田舎者の私を大事にしてくれた先生でした。



▲1952年3月 東大で

縄文講義メモノート▶



※巻頭連載は隔月です。次回は塚本先生です。

目次

■田舎考古学人回想誌	山内清男先生の東大理学部研究室・縄文原体の授業	神村 透 …1	■リレーエッセイ	マイ・フェイスレット・サイト(第102回)	松原信之 …3
■考古学の履歴書	公務員としての考古学研究者(第6回)	石井則孝 …2	■考古学者の書棚	『考古学が語るシルクロード史』	山口欧志 …4

考古学の履歴書

公務員としての考古学研究者(第6回)

石井 則孝

《Mr.オープン屋—その2》

—前回の続きとして、建築設計者と学芸員との考えの違いについて記していく—

(ロ) カーテンの構造と材質

室内のカーテンは、通常普通の家庭にもある上下に上げ下げ出来るものが使われている。

大きな部屋や大きなウィンドウのガラス面に縦構造の金属製の横引きカーテンが使われることがある。これを天井部に近い三角窓のところに電動式のを設置したことがあった。私は、薄いひらひらのが落ちた時はどうするのか? これは無理だと主張したが、相手はデザイン優先で押し切られてしまった。しかし、結局オープン当初から動かず、現在でも三角窓は開放されたままである。

(ハ) 外光と布製カーテンの問題

美術館等に外光を取り入れることが流行っていた頃、壁面への採光として、天井部から外光を取り入れる設計が行われた。(当然反射光の採光ではあったが)、建物全体が中央フロアを中心に、長く東・西・南に伸びる構造の展示棟であった。太陽の位置は、当然ながら一年中変化し、光度も夏と冬では相当の違いが出る。そこで生じてしまったのが、南面する壁面と北面する壁面との光度の大きな違い、これは大変なる問題となり、各種の布を使っての光の遮断を試みたが全て失敗、これは当たり前なことであった。布の材質によって透過する光の色調は全て異なることの違いを設計者は知らなかった。木綿・人絹・絹・麻等色々を試みたようであったが、全て無為、結局従来から使われていた裏地赤、表地黒の木綿地のカーテンを使用して、外光を遮断し、全て人工光での美術館へと様変わりしてしまった。設計者は、当時日本国内でNo.1といわれていた人物である。また、ホールなどに使われていた金属製の縦構造のカーテンは、金属の重さに耐えきれず全て破損してしまった。従来からの上げ下げカーテンを超えられなかった。

(ニ) 外壁の厚さ

K博物館の事例で、構造物の外壁の厚さが12cmくらいだったかと思う。

私は、建築会社にこんな薄い外壁で大丈夫かと、せめて15cm以上ないとだめではないかと云っていたところ、完成後、大雨が降った際予想通り雨漏りと外壁からも雨水の浸透があり、結局屋上は全面水浸透除けのシートを貼り、壁面部には、ひび割れ部分に浸透除けの薬剤を注入しなんとかオープンへとこぎつけた。施工会社がT工務店であったので、私は「雨漏り工務店ですね」といったところ、云われても仕方がないと認めていた。

そのほかの水の浸透問題としては、一方の壁面が山側にあり、崖を削ってそこへ直接コンクリートを打ち込み、崖面を固め、建築物と一定の空間を取り山側から流れ込む水の逃げ道を造る。

これも施工方法に失敗した例として、K博物館があった。数年後に各所からの水の浸透がはじまり、五年後に大改修を行って水迷しを行った。

このごろの設計者は、水と光に対しての研究が未熟であったことが良くわかり、博物館学を教える私にとっても大きな研究課題としてとらえている。この雨水の問題は、普通のビルや住

宅を建てる際にも重要事項で、私自身肝に銘じて現在でも、設計者と議論を交わし雨水の逃道を研究している。

(ホ) 便所の数と男女わけの問題

「利用者の利便性を考え、男女の入り口は別々に作るべし」これが私の公共物の利用者としての長年の経験から得られた結論である。ほとんどの設計者は、便所は見えないところに造りたがり数を減らしたいという。こうなると便所研究の第一人者、慶応大学名誉教授で長く大田区立郷土博物館の館長であった西岡秀雄先生を忘れてはならない。トイレトーパーの研究から始って、つきることのない先生のウンチクある話は、世界広しといえども右に出るものはいない。日本の博物館学の世界で先生が存在を忘れてはならない。余談ではあるが、牛肉料理の「しゃぶしゃぶ」は、先生が祇園で遊んだときに、おかみから「こういう料理はどのような名前にしたら?」と聞かれた時、やおら牛肉を箸でつかみ鍋の中に入れ「しゃぶしゃぶ」すれば良い。これが語源となった。

T博物館を造った時、三階建てだったので各階に、入口は男女別左右に別れて階段近くの便利なところへ便所を作ってくださいと注文した。設計者は二ヶ所作れば良いと主張していたが、これは私の主張通りになった。大勢の児童生徒が来館しても大丈夫で、今も喜ばれている。女性が嫌う音の問題も解消した。この件と窓のカーテン等々のいくつかの対立点があって、設計者は一ヶ月半ほど顔を見せず現場は弟子まかせにしていたことを前回は記したが、この時ほど建築のノウハウを学んでいたことの喜びを感じたことはなかった。

4. 教室における博物館学教育

(イ) 女子大が欲しがらる資格

これこそ理論よりも実学を学ばせるべきで、一時期どこの女子短大でも募集要項に「2年間で学芸員資格が取れます!」との大宣伝を行っていた。「学芸員補」であることをウソをついて募集していたのであった。戦後の大学のカリキュラムを振り返ってみると、流行というものがあって、昭和と平成の時代ではその変化が激しい。

(ロ) 教室における博物館学講座

私は、教室での授業は、理性の教育と位置付け、読む・書く・語る・考えるを基本として教えていた。実習として外へ出掛けた時は、モノと対面することで目を集中させ、感性豊かな人間になるようにと五感で知る学問を教えてきた。

資格が取れたとしても大学4年卒即学芸員は到底無理な話で、教養課程を学んだ程度では学芸員は務まらないと大学人は知ってほしい。大学院へ進ませて、その間に博物館・美術館等で実習させ、ようやく少しは博物館人として使えるかなというのが現実である。

略歴	
1936年	東京鷺宮に生まれる
1964年3月	早稲田大学大学院文学研究科芸術学専攻修士了
同年3月1日	文化財保護委員会記念物課(現文化庁)へ入省
同年5月1日	奈良国立文化財研究所平城京跡発掘調査部へ異動
1970年4月1日	千葉県教育委員会へ異動
1980年4月1日	東京都教育委員会へ異動
1996年7月15日	東京都埋蔵文化財センター所長で定年退職。公務員生活終了
この間、筑波大学・早稲田大学等9大学の非常勤講師を歴任。昭和女子大学は70歳定年まで22年間勤務	
2001年4月1日	帝京大学文学部専任講師
2007年3月	定年退職

ヨーロッパではキューレーターというと相当地位が高いが、日本ではそれほどでもない。このことは現実に当たって経験すれば良く分かることである。私は、30年近く各地の学芸員採用のための試験問題を作ってきたが、さすが最近是不景気と見え、新館のオープンも無く別分野の専門職採用の為の試験も無く学生たちにとって最悪の時代である。考古学専攻生にとっても

現実的に大変厳しいものがあり、たまに、美術系の専門職採用があるものの、現実的にみていくと、学芸員養成講座をもっている大学こそ、修士課程でのカリキュラムを多様化させ、外国語教育に力点を置いて、建築・美術・保存科学・生物・植物学等に関心をもたせ、幅広い学問と技術を習得させ世界へも通じる素養のある学生を育てていただきたいと念じている。

隔月連載です。次回は渡辺誠先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 102

プエブロ・ビエッホ遺跡 ～ メキシコ合衆国オアハカ州ミステカ・アルタ地方 —— 松原 信之

メキシコの遺跡と聞いて、皆さんはどのような遺跡を思い浮かべるでしょうか？具体的な遺跡名は思いつかなくとも、精密な曆を作り上げたことで知られるマヤや、独自の宗教観をもつアステカといった名前は耳にされた事があるかと思います。また、世界で三番目に高いピラミッドといわれている太陽のピラミッドのあるテオティワカン遺跡は、最近テレビなどのメディアでよく取り上げられるようになりました。少しずつ、日本でも知られるようになってきたメキシコの古代文明ですが、まだまだ知られていない興味ある遺跡が数多くあります。私は、メキシコの考古学をもっと知りたいという理由から1999年1月にメキシコに渡り、メキシコ国立人類学歴史学学校(ENAH)に入学しました。以後、日本へ帰国するまでの約12年の間、幸運にも数多くの調査に参加させてもらうことができました。今回は、私が参加した発掘調査の一つであるオアハカ州ミステカ・アルタ地方のプエブロ・ビエッホ遺跡について紹介したいと思います。

遺跡の所在するミステカ・アルタ地方は、オアハカ州中部を横断する標高2400m～2600mの山々が連なる山岳地帯にあります。サボテンと灼熱の太陽のイメージが強いメキシコですが、この地方は標高が高い為、朝・晩はかなり冷え込みます。そして、緑の山々と眼下に広がる雲海、手に取れそうなくらい近くを流れる雲といった山岳地域特有の風景の中に16～17世紀に建てられた小さな古い教会などが溶け込み、現在のミステカ・アルタはヨーロッパとメキシコ古来の文化、そして自然がうまく調和した美しい風景が見られる所です。プエブロ・ビエッホ遺跡は、その中にあるユクンダア山の中腹～山頂部一帯に広がる11世紀～16世紀の遺跡です。

もともとなだらかで広い山頂部を持つ標高2400mのユクンダア山は、自然の地形を利用して紀元1000年頃からミステカ族によって様々な建造物が建てられ始めました。ピラミッ



ミステカ・アルタ地方の夜明け

ド型建築物や大規模なプラットフォーム、石組みの柱などを持つ建築物やフェゴ・デ・ペロータと呼ばれる宗教行事と深く結びついた球戯場、ミステカ・モザイクと呼ばれる特有のデザインで飾られた通路などが次々と発掘によって発見されました。また、建造物が集中する山頂部には多くのテラスが見られ、中腹部にはグラン・カルサーダと呼ばれる石組みの道が山を取り巻くように作られています。この道は城壁として、またこれより上部を政治や宗教行事をつかさどる重要な場所として区別する役割なども果たしていたのではないかと考えられています。プエブロ・ビエッホ遺跡は紀元1550年前後に境に放棄されますが、その間この地方を治めていたミステカ族の重要なセンターの一つとして機能していたと考えられています。

このプエブロ・ビエッホ遺跡は2004年から2009年にかけて発掘調査が行われました。当時、ENAHの学生であった私は、偶然にも第一期調査から参加させてもらう機会に恵まれ、卒業後も調査員として様々なことを経験し学んだ思い出深い遺跡の一つといえます。プエブロ・ビエッホの発掘調査は、メキシコの考古学者だけではなく、アメリカやフランス、オランダからも参加する国際的なもので、はじめはスペイン語すらままだらなかつた私は彼らとの共同生活において戸惑う事が多々あったことを思い出します。しかしながら、良き仲間と巡り合い、理解し合い、共に一つの目的を持って調査を進めてゆく上で、調査方法や考古学という学問を学んだだけではなく、文化とは何か、そして文化の違いとはどういうことなのかを身を持って学んだ調査でもありました。

日本の約5倍という面積を持つメキシコには、調査の進んでいない遺跡や現在調査・保存中の遺跡が数多くあり、今後も新たな発見が続いてゆくものと思われます。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは松田度さんです。



プエブロ・ビエッホ遺跡の発掘風景

考古学者の書棚

「考古学が語るシルクロード史 中央アジアの文明・国家・文化」

エドヴァルド・ルトヴェラゼ(著)、加藤 九祚(訳)／平凡社(2011) ————— 山口 欧志

初めての海外は、修士課程1年(2001年)の夏。サハリン島南端の海岸段丘上に立地する土城の調査だった。調査地に向かう道中、なぜかロシア国境警備隊の施設で兵士達とバーニャ(ロシアのサウナ)に入ったり、キャンプ地では月明かりの下、クマの姿が見えた夜もあった。その後も、モンゴル・インド・ウズベキスタンでの調査を経験する機会に恵まれてきた。

このうち中央アジアに位置するウズベキスタンでの調査は、2005年に宇野隆夫先生が声をかけてくださったのがきっかけだ。以来、毎年約1ヶ月間、シルクロード都市遺跡ダブシアの調査に参加している。朝夕の冷え込みと昼間の暑さは体にこたえるが、ユーラシア東西交流の痕跡を直に触ることができて、本当に幸せだと思う。

ただ、日本で出版されている中央アジアシルクロード遺跡に関する考古学関係の研究書籍は、欧米圏と比較するとかなり寂しい状態にある。そんな中、ウズベキスタン共和国科学アカデミー正会員のエドヴァルド・ルトヴェラゼ(Edvard Rtveldze)先生の著書が、加藤九祚先生により日本語に翻訳され、2011年5月に刊行された。

ルトヴェラゼ先生は、現在70歳。中央アジアを代表する考古学者の一人であり、論文約650点、単著約20冊を発表、それらは約10カ国で翻訳刊行されており、各国での講演もされている。また訳者の加藤九祚先生は、皆さんご存知だと思うので詳述を避けるが、1998年からウズベキスタンのテルメズで仏教遺跡の調査に携わっておられ、その成果は日本で開催された「ウズベキスタン考古学新発見展」などで公開された。

拙稿では、このお二人による『考古学が語るシルクロード史 中央アジアの文明・国家・文化』を取り上げる。本書は、B5版で本文296頁であり、新たに多数の地図・図版が追加された。本の章立ては次の通りである。

序文

日本語版序文

凡例

I 文明

1. 中央アジア文明の起源
2. 文化史的地域—中央アジア文明の基礎
3. 歴史的文明、国家と古代都市
4. 文明発展の要素としての民族の移住

II 国家

1. 中央アジアにおける初期のステートフッド [statehood、国家であることの地位]
2. 国家形成のタイプ
3. 前1000年紀初めから紀元3-4世紀までの中央アジアにおける国家と所領 [Territorial Possessionsの支配者の称号 titles]
4. 芸術の深化と国家の発展
5. 古代中央アジア国家における徴税業務と貨幣
6. 中央アジア古代国家の国際関係

III 精神文化

1. 文字の文化—文明と国家の発展水準を決定する要素

2. 世界宗教の東トルキスタンと極東への伝播における中央アジアの役割

IV 文化の移動

1. 大シルクロード
2. 中央アジアにおけるギリシア人 Hellenes とヘレニズム文化 Hellenistic Culture
3. 中央アジアとアペニン半島 (イタリア半島)
4. 中央アジアとイベリア半島
5. ソグド人—東方へのパイオニア
6. 航海と水運業のソグド人
7. 中国と中央アジア
8. インドの道：インド—中央アジア—ザカフカス
9. 古代コーリアと古代中央アジア

付録 玄奘の中央アジア旅行経路

著者略伝 (中央アジア考古学への道) 加藤九祚

参考文献

訳者あとがき

索引

本書の対象は、「西はカスピ海、東はパミール、南はコペトダク山脈とヒンドーククシュ山脈、北はアムダリヤとシルダリヤに広がる」、古くは中央アジアと呼ばれる地域である。もちろん、アルタイ・モンゴル・東トルキスタン・チベット・中国および極東地方・地中海諸国との関係といった視座からも検討されている。また年代の主たる範囲は、紀元前2000年から紀元後4-5世紀であるが、必要に応じて中世まで及ぶ。そして本書の目的は、「大西洋から太平洋までの広大なユーラシア大陸のける中央アジア文明と国家の発展および諸文化の相互作用の広いパノラマ」を提供することにある。

本書には、これでもかというほどの良質な中央アジアシルクロード史に関する資料と考察が濃密に凝縮されている。著者自ら「本書に、長年の間に自分が得た中央アジアに関する全知識をつぎ込んだ」と述べ、訳者の加藤先生が「訳者にとっても過去数十年にわたる中央アジアとの関わりのひとつの到達点であるように思う」、「日本における中央アジア、さらにはシルクロード研究の一道標になる」と評した点も、この本の価値を物語っているといえよう。

本書中の図「中央アジアのシルクロード」には、今年で調査8年目となるダブシア遺跡も掲載されている。なんだかちょっと嬉しい。ダブシア遺跡は現存面積80ha、元々は120haあったとされる大規模な都市遺跡だ。今はツィタデリ(内城)という遺跡の中核部を発掘調査している。トレンチの深さはすでに8mを超える。拙稿が掲載されるのは、ちょうど8年目の調査の終わるころ。今年はどうなダブシアに出会えるだろうか。いつもの皆は元気かな。日本を発つのは明日。楽しみだ。

アルカ通信 No.109

発行日 2012年10月1日
 発行人 角張淳一
 発行所 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801
 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp
 URL : http://www.aruka.co.jp